

# ほんばこ



No. **67**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 67 号 (通巻第 83 号)

2022 年 11 月 15 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<https://www.jec.or.jp/tosho/>

## ● 目 次 ●

- ◆ 旅と読書 梶原 貴 2 ~ 3 p
  
- ◆ 寄贈図書 4 p
  - ・『いま、話しておかないと』《教師たちの戦時下体験》  
福岡高教組退職教職員の会編
  - ・『伝えたい福島原発事故から10年』  
福島県退職女性教職員あけぼの会編
  
- ◆ 最近の受入図書 (2022年4月~2022年10月受入) 5 ~ 7 p
  
- ◆ 教育図書館のご案内 8 p

## 旅 と 読 書

梶 原 貴

幼い頃、ムーミンのスナフキンのような生活に憧れ、小学校から中学校の時は植村直己の冒険に心を奪われた。テレビのドキュメンタリーに出てくる植村の詳しい足跡が知りたくて、冒険後しばらくして出版される彼の本を読んだ。しかし大学入学までの間、読書と呼べるものはそれしかなかった。

大学生になり自転車サークルに所属し、長期休暇のたびに1か月アルバイトをして、1か月旅行する生活を繰り返していた。旅のスタイルは、自転車にテント、シュラフ、炊事用具を積み、5～6人の仲間で野宿。現地までの移動はもちろん「青春18きっぷ」。目的地はざっくりとエリアを決め、この夏は北海道、次の春は四国等、4年間で沖縄を除く46都道府県を訪ねた。その旅の友が読書になっていった。

お金もなく、新しい本を買うことは稀で、図書館で借りたり友だち同士で貸し借りをしたりしながら、周囲からすすめられる本を読んでいた。もちろん古本屋にも通い、神保町にも何度か来ていた。そんな乱読の中で、いつの頃からか我々の中で人気になっていたのが、先輩がすすめてくれた沢木耕太郎の『深夜特急』だった。香港からシンガポール、インドのデリーを経てパリまで乗り合いバスで旅する紀行文で、旅の途中で出会う人々との交流や自身の旅への問い掛けなど、当時の自分たちの貧乏旅行と重ね合わせて、貪るように読んだ記憶がある。今でこそ「旅のバイブル」と称されるくらい、その筋では名が通る著作だが、当時はまだそれほど一般化していなかった。当然文庫になる前のハードカバーで、自転車に括り付け

たバックの中でかさ張る存在だったが、正に私たちにとっての「バイブル」だった。

私たちのサークルは「バイロロジー」という考え方に根差していた。環境負荷の少ない自転車（bike）を使って移動しながら、その土地々々の自然・生態（ecology）を見聞きし、環境問題を考



えるという、言葉にすると崇高なものだが、ただ自然が好きだから海山に出かけ、移動手段は貧乏だからお金のかからない自転車を使っただけだったが……。やはりそこでも大学生の植村直己が貧乏をしながら登山や冒険を続けて、やがて犬ぞりなど環境負荷の少ないスタイルで偉業を達成していく姿と重なるものを感じていた記憶がある。

グループを組んで旅をするが、私たちの好みは山深い未舗装の林道を次々に辿りながら走るスタイルだった。1日走って、夕方、野宿に適したところが見つかり、その日の行程は終了。その後、自転車の修理をする者あり、本を読む者あり、釣りに出かける者あり、思い思いに過ごしていた。私も時々スナフキンのように釣りをした。暗くなり、本が読めなくなると、夕食の焚火を起す。焚火を囲んで食事をし、酒を飲んだ。話題はその日のコース、次の日の天気（AMラジオから流れてくる気象通報を聞きながら、当番が天気図を書いた）や予定、自転車の整備やパーツの話、次のレースの戦略等、とりとめのないものだった。

しかし酔いが回ると話題は決まって、当時から問題になっていた、地球規模の環境問題や自然保護等についてだった。自然は単なる保護の対象か

それとも保全しながら利活用していくべきものなのか、そもそもこの林道は必要なのか等々。

最後の結論は「俺たちはまだ日本しか見ていなくて世間が狭いのではないか？」となり、やはり世界を見るには『深夜特急』のように、言葉は通じなくても、現地の人々と触れ合い、同じものを食べ、同じ酒を飲んで、市井の人々と同じ乗り合いバスに乗って旅をし、見聞を広めなければ、「井の中の蛙大海を知らず」ではないのか。俺たちも海外に出ようではないか。行くんだったら『深夜特急』のコースだろう。俺たちはアジア人としてまずはアジアを知らないとならないのではないか。白人や黒人と自分たちはどう考え方が違うのか、同じなのか……。大学の頃の背伸びをした、どこかで聞きかじってきたような議論だったのである。一冊の本を介して、似て非なる者同士が「作者だったらこうするだろう」「いやそうではない」あーでもない、こーでもないが続く。時には空が白くなり焚火が燃え尽きるまで延々と環境問題と『深夜特急』の話が続いてしまうこともあった。その場でシュラフに寝て、朝日に照らされて起きることも。そしてコーヒーをすすりながらまた『深夜特急』を読んでいると、一人二人とボサボサの髪で起きてきて、同じようにコーヒーをすすりながら2セットあった『深夜特急』第一便、第二便（確か第三便は遅れて出版された）を思い思いに読み進める。今考えると何とどのんびりとゆたかな時間だったことか。

一つ鮮明に覚えているのが、自分たちも旅の後半になってくると「街に戻りたくない、いや戻れないのではないか」という旅の「中毒」に似た症状に見舞われることがあったが、沢木も同じ感覚を持ったというくだりを読んだときのことだ。はっとして何度も読み返した。彼もどこかの街角で、旅から旅を繰り返している若者の目が淀んで精気がなく、ただ旅に身を置くことだけが目的化

して、自分もやがてそうなるのではないかとショックを受けたという部分がある。そんな作者と自分たちの共感できる内容があると、ますます読み進めたいくなるものだ。幸い自分たちも軽度の「中毒」を経験しただけで、旅を楽しむことができてよかった。

その後、気が付けば沢木耕太郎の著作を読み進め『テロルの決算』『一瞬の夏』等のノンフィクションの面白さに「はまって」いった。電車の中で読んだり、授業の空きに読んだり、その頃から読書が面白くなっていった覚えがある。作者と自分の体験が重なり、それを同じ行動をしている仲間同士で共有できると、一度も話したことの無い作者が身近に思えてくる。読書は不思議なものだとつくづく思う。

(一般財団法人日本教育会館 館長)

#### 教育図書館にある本から

『世界は「使われなかった人生」であふれている』 沢木耕太郎著 幻冬舎文庫  
2007.4

映画評論家の淀川長治さんが亡くなる5年ほど前、著者が淀川さんと対談したときのこと

無礼を承知でこんなことを訊ねた。淀川さんから映画を引いたら何が残るのですか、と。

すると、淀川さんは、あんたはやさしい顔をしてずいぶん残酷な質問をするね、と笑いながらこう答えてくれた。

「わたしから映画をひいたら、教師になりたかった、という夢が残るかな」

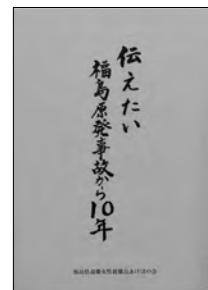
《寄 贈 図 書》

『いま、話しておかないと』  
《教師たちの戦時下体験》



福岡高退教五十周年記念事業委員会  
福岡高教組退職教職員の会 2022. 8

『伝えたい福島原発事故から10年』



福島県退職女性教職員あけぼの会 2022. 6

福岡高教組退職教職員の会は、今年8月20日に結成50周年を迎え、それを記念しての出版となりました。

この冊子は、福岡高教組退職教職員の会の機関紙『高退教だより』に会員が投稿連載してきた「私の戦時体験50編」を8編に編集したものです。

- I 軍隊・戦地体験 II 空襲と銃爆撃体験
- III 原爆体験 IV 外地の生活と引揚体験
- V 戦時下の教育・勤労働員
- VI 戦時下の日常
- VII 外地の聴き取りと語り継ぎ
- VIII 平和を求めるとりくみ

戦争を知らない若い教員の方々に理解を得られ、語られた体験より深く伝わるように、戦争や軍隊にまつわる用語、当時の日常生活や学校制度等には語釈が加えてあります。

「戦争の記憶はそれを受け継ぐ若い世代へそれぞれの『世代の記憶』として積み重ねていかねばならない。」

多くの人に読んでいただければと思います。

2011年3月の東日本大震災から十年、状況はどう変わったのかを伝えていくために『福島県退職女性教職員あけぼの会より発刊されました。コロナ禍の中、県内各地から寄せられた原稿により編集されています。その思いのこもった挨拶状を紹介させていただきます。

私たちは、地域における図書館の果たす役割に期待しております。私たち福島県退職女性教職員あけぼの会は、退職後も、子どもたちが健やかに育ってほしい、子どもたちが安心して過ごせる平和な未来を願い、微力ながら活動しております。

私たちは、震災・原発の2年後の2013年、この大災害を忘れてはならないとの思いから『伝えたい福島の3.11』と題した記録集を発刊しました。そして、10年目に当たる昨年、時が経ったからといってその事実を風化させてはならないとの思いを込めて、『伝えたい福島原発事故から10年』を発刊することになりました。

教職を経験した私たちは、常に子どもたちが安全に、安心して過ごせる社会を心から望んでいます。福島原発のような事故は、決してあってはならないと考えています。そのためにも多くの方にお目通しいただければ幸いです。

## 最近の受入図書

(2022年4月～2022年10月受入)

### 【日教組刊行物】

『日本の教育』第71集 日本教職員組合編著 アドバンテージサーバー 2022.8

『健康権確立に向けて ― 第60回日教組養護教員部研究集会記録』日本教職員組合編集 アドバンテージサーバー 2022.3

『健康施策と養護教員』学習シリーズ22 日本教職員組合養護教員部編 アドバンテージサーバー 2017.3

『日教組養護教員部70年史』日本教職員組合養護教員部編 アドバンテージサーバー 2022.10

### 【教育総研・県教組刊行物】

『教育総研30年史』一般財団法人教育文化総合研究所編集・発行 2022.3

### 【文部科学省関係】

『文部科学統計要覧令和4年版』文部科学省著 株式会社ブルーホップ 2022.6

『諸外国の教育動向 2021年度版』文部科学省著 明石書店 2022.9

### 【平和資料】

『13歳からのウクライナ戦争150日新聞』黒井文太郎監修 宝島社 2022.9

『帝国日本のプロパガンダ』貴志俊彦著 中央公論新社 2022.6

『シベリアに逝きし46300名を刻む』村山常雄著 七つ森書館 2009.8

『軍隊と戦争の記憶：旧大阪真田山陸軍墓地、保存への道』小田康徳著 阿吽社 2022.5

シリーズ戦争と社会3 『総力戦・帝国崩壊・占領』蘭信三ほか編集委員 岩波書店 2022.3

シリーズ戦争と社会4 『言説・表象の磁場』蘭信三ほか編集委員 岩波書店 2022.2

シリーズ戦争と社会5 『変容する記憶と追悼』蘭信三ほか編集委員 岩波書店 2022.4

『七三一部隊と大学』吉中丈志編 京都大学学術出版会 2022.4

『ホロコーストとヒロシマ』加藤有子編 みすず書房 2021.12

### 【人権】

『きみはどう考える？ 人権ってなんだろう』1-3巻 喜多明人監修 汐文社 2021.3

『子どもへのハラスメント』喜多明人監修 PHP研究所 2021.3

『障害者権利条約の実施』長瀬修著 信山社 2018.12

『地域がはぐくむ人権』神奈川県教育文化研究所編集・発行 2005.8

『地球市民の人権教育』肥下彰男・阿久澤麻里子編著 アジア・太平洋人権情報センター協力 解放出版 2015.10

『開かれた扉』ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団著 講談社 2003.5

『子どもの相談・救済と子ども支援』荒牧重人 半田勝久 吉永省三編 日本評論社 2016.7

『アイヌ民族：歴史と現在』小・中学生向け副読本編集委員会編集 アイヌ文化振興・研究推進機構発行 2008.3

教師用指導書編集委員会編集 アイヌ文化振興・研究推進機構発行 2011.3

『施設でくらす子どもたち』平湯真人編 明石書店 1997.3

### 【防災・減災】

『東日本大震災の記録』岩手県宮古市編集発行 2013.3

『東日本大震災活動の軌跡』日本労働組合総連合会「連合東日本大震災活動の軌跡」編集会議 日本労働組合総連合会 2012.3

【和雑誌】

『内外教育』No. 6937－6964時事通信社編 時事通信社発行 2021.9－12 【合本】

【教育・経済・社会】

『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』広田照幸著 筑摩書房 2022.5

『教師をやめる：14人の語りから見える学校のリアル』前屋毅著 学事出版 2021.6

『いじめ・自殺はなぜなくなるのか』児玉勇二著 明石書店 2022.3

『大正自由教育が育てた力』門脇厚司著 岩波書店 2022.8

『近現代日本教員史研究』近現代日本教員史研究会 船寄俊雄編著 風間書房 2021.12

『教育の未来』安西祐一郎著 中央公論新社 2022.8

『教育は社会をどう変えたのか』桜井智恵子著 明石書店 2021.9

『みんなの「今」を幸せにする学校』遠藤洋路著 時事通信出版局 2022.4

『大学におけるオンライン教育の現状と展望』早稲田大学教育総合研究所著 学文社 2022.3

『一斉休校そのとき教育委員会・学校はどう動いたか?』末富芳編著 明石書店 2022.3

『集まる場所が必要だ』エリッククリネンバーグ著 英治出版 2021.12

『アーカイブの思想』根本彰著 みすず書房 2021.1

『法情報の調べ方入門』ローライブラリアン研究会編 日本図書館協会 2022.3

『子供・若者白書』令和4年版 内閣府編 日経印刷 2022.7

『言葉を失ったあとで』信田さよ子・上間陽子著 筑摩書房 2021.11

『子どもの「やりたい!」を自律した学びにつなげる「学びのミライ地図」の描き方』山本崇雄著 学陽書房 2022.4

『本が語ること、語らせること』青木海青子著 夕書房 2022.5

『著作権ハンドブック』宮武久佳・大塚大著 東京書籍 2021.9

『ヤングケアラーってなんだろう』澁谷智子著 筑摩書房 2022.5

『一万年生きた子ども：統合失調症の母をもって』ナガノハル著 現代書館 2021.11

『ヤングケアラー』毎日新聞取材班著 毎日新聞出版 2021.11

『子どもへのワクチン接種を考える』藤沢明徳・鳥集徹著 花伝社 2022.6

『学校制服とは何か』小林哲夫著 朝日新聞出版 2020.10

『学校組織の解剖学』鈴木雅博著 勁草書房 2022.1

『カチンの森』ヴィクトルザスラフスキー著 みすず書房 2022.5

『聖職と労働のあいだ』高橋哲著 岩波書店 2022.6

『スマホで薬物を買う子どもたち』瀬戸晴海著 新潮社 2022.7

『定時制高校の教育社会学』佐川宏迪著 勁草書房 2022.1

『「ひきこもり」から考える』石川良子著 筑摩書房 2021.11

『検証・統一教会＝家庭連合』山口広著 緑風出版 2017.4

『アジア・太平洋戦争と日本の対外危機』片山慶隆編著 ミネルヴァ書房 2021.6

『子どもの道徳的・法的地位と正義論』大江洋著 法律文化社 2020.10

『わが国の教育改革 その光と影』小野元之著 学校経理研究会 2022.3

『武士に「もの言う」百姓たち』渡辺尚志著 草思社 2022.4

『存在しない女たち』キャロラインクリアド＝ペレス著 河出書房新社 2020.1

『最新保育資料集2022』大豆生田啓友・三谷大紀  
編 ミネルヴァ書房 2022. 4

『カフェのできる学校、できない学校』特定非営  
利活動法人パノラマ 眺望出版 2022. 2

『非正規教員の研究』佐藤明彦著 時事通信出版  
局 2022. 2

『新版ニイル選集』2－5巻 ニイル著 堀真一  
郎訳 黎明書房 2009. 6

『教育鼎談』内田樹、寺脇研、前川喜平著 ミツ  
イパブリッシング 2022. 4

『基地労働者から見た日本の「戦後」と「災後」  
と「今後」』春田吉備彦、全駐留軍労働組合中  
央本部編著 労働開発研究会 2021. 9

『従順さのどこがいけないのか』将基面貴巳著  
筑摩書房 2021. 9

『大東亜共栄圏のクールジャパン』大塚英志著  
集英社 2022. 3

『失敗しないためのジェンダー表現ガイドブック』  
新聞労連ジェンダー表現ガイドブック編集チー  
ム著 小学館 2022. 3

『新火を産んだ母たち』井手川泰子著 海鳥社  
2021. 12

『フリーランスの労働法政策』濱口桂一郎著 労  
働政策研究・研修機構 2022. 3

『「米留組」と沖縄』山里絹子著 集英社  
2022. 4

『1950年代教育史の研究』野間教育研究所紀要第  
64集 日本教育史研究部会編集 野間教育研究  
所 2022. 3

『ストレス脳』アンデシュ ハンセン著 新潮社  
2022. 7

『公民科授業実践の記録』西尾理著 学文社  
2021. 12

『子どもが心配』養老孟司著 P H P 研究所  
2022. 3

『ちいさい・おおきい・よわい・つよい お母さ  
んの当事者研究』熊谷晋一郎＋当事者（お母さ  
んたち）著 ジャパンマシニスト社 2020. 4

『母親になって後悔してる』オルナ ドーナト著  
鹿田昌美訳 新潮社 2022. 3

『地図帳の深読み』今尾恵介著 帝国書院  
2019. 8

#### 【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『あなたはどこで死にたいですか？』小島美里著  
岩波書店 2022. 7

『団地のふたり』藤野千夜著 U-NEXT  
2022. 3

『パリの空の下で、息子とぼくの3000日』辻仁成  
著 マガジンハウス 2022. 6

『掬えば手には』瀬尾まいこ著 講談社 2022. 7

『ギフトッド』鈴木涼美著 文藝春秋 2022. 7

『おいしいごはんが食べられますように』高瀬隼  
子著 講談社 2022. 3

『パチンコ』上・下 ミンジンリー著 文藝春秋  
2020. 7

『僕の狂ったフェミ彼女』ミンジヒョン著 加藤  
慧訳 イースト・プレス 2022. 3

『たんぼぼ球場の決戦』越谷オサム著 幻冬舎  
2022. 6

『三千円の使いかた』原田ひ香著 中央公論新社  
2021. 8

『夜に星を放つ』窪美澄著 文藝春秋 2022. 5

#### 教育図書館について

教育図書館は、1966年10月1日、（財）日本教育会館の附設図書館として設立されました。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほか、教育文化総合研究所（略称教育総研、前身は国民教育研究所）の研究成果、教育学一般、教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供しています。

## 教育図書館のご案内

### 《利用方法》

開館日：(火)・(水)・(木)

開館時間：午前10時～午後4時30分

閲覧：メールにて予約をお願いします。

✉ toshokan32304437@jec.or.jp

貸出：利用者カードの発行が必要です。

身分証明書をご持参ください。

(貸出5冊 3週間)

### レファレンス・サービス

当館所蔵の図書資料に関するお問い合わせは  
メールでお申し込み下さい。

コピー：白黒1枚10円／カラー30円

### 《特別コーナー》

- 平和資料コーナー  
反核・平和運動、平和教育教材・実践記録、  
戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー  
日教組教育新聞・教育評論・月刊JTUなど
- 教育総研刊行物コーナー  
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物  
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導  
要領、指導書など
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育  
総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室  
相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー  
人権関係、東日本大震災など災害の記録等

### 《蔵書について》

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約69,000冊
- 教育図書館のホームページから蔵書検索できます。

(<https://www.jec.or.jp/tosho>)

### 《アクセス》

神保町駅 A1出口より徒歩3分

九段下駅 6番出口より徒歩7分

竹橋駅 1b出口より徒歩5分

水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

**アクセス抜群**  
**神保町駅から徒歩3分**  
**802名収容の大ホール**

日本教育会館  
フロンティア・会議Yのご案内  
一般財団法人日本教育会館

10～300名  
まで使える  
会議室(18室)

1階画廊  
もご利用できます

一般財団法人日本教育会館  
TEL 03-3230-2831  
<https://www.jec.or.jp/>  
受付時間 9:00～17:00